漢語の身体名称に見られる特殊変化（1）

—「踝」の諸語形をめぐる憶説—

太　田　　斎

§0　前　言

使用頻度の高い身体名称には syntagmatic な要因による特殊変化のみならず，「類音牽引」，「混交」，「民間語源」などの paradigmatic な要因による変化も多く生じている。既に岩田（1995）が「膝頭」について指摘しているが，この現象は「膝頭」のみに留まるものではなく，多くの語彙に見られる。本稿では特に中国語北方方言のデータを用いて「踝」を主たるテーマとしてこの二つの面に関わる変化について論じることにしたい。このような考察には複数の解釈が成り立つのが常であり，より多くの事例が説明できて，且つシンプルな説が最も蓋然性の高いものとして採用するが，ただ一つの説が他者を圧して有力というケースは稀である。それ故幾つかの解釈を提示するに留まっている場合もあり，また中にはデータが不十分で現時点では場当たり的との印象を拭えないような解釈しか提示できないようなものもある。副題で憶説としているのはこのような事情からである。以下，方言の例は全て文献に拠る。音声形式を国際音声記号（IPA）で表示する場合，説明文において現れるときのみ［ ］に入れ，挙例においては［ ］は省略することを原則とするが，徹底していない。ピンインによる方言音表記は／／で括って示す。IPA とピンインの両方がある場合は特に問題がなければ，前者のみ挙げる。声調の表記は調値記号を数字に置き換え，数字による調類表示は調類記号に置き換えた。軽声の調類記号・は取り去る，つまりゼロ表記とする。

それ以外は所拠文献そのままである。推定音価は中古音に関しては*を付して平山（1967）を使用する。現在の方言語形を説明するにはより後の時代の推定音価を提示する必要が生じる場合があるが，そのときはこれに必要な修正を加える。具体的音価の異なる方言形式を同一平面上で比べるためには若干の音韻論的処理を施した超方言的表記を用いる。概ね注音字母をローマ字化したものと思えば良い。但し単母音［ɿ, ʅ, i,u,y］については解釈を保留し，そのままにした。→は個別の変化によって矢印の左の語形，音声が右のように変わったことを示し，音韻変化を示す＞とは区別する。同様に←は矢印の左の語形，音音声形式が右側の形式に由来することを示す。「 」で中国語の一連の同源語彙に対応する日本語を提示する。“ ”は説明の文中において中国語の語彙を示す際に用いる。挙例に際してはときに← “ ”のように語源を示すこともある。矢印左側の形式は右側“ ”内の漢字表記が本来の語源であることを示している。繁雑になるのを避けるため，同形式の方言語形は漢字表記と音声記号が同じであれば（調値の違いは無視する），そのうちの一つに代表させ，他は末尾に方言名と所拠文献の頁数のみ挙げるに留める。方言データの所拠文献については一方言に複数件ある場合及び複数の方言を含む広域的報告に関してのみ略称を付した。近年中国の地名はかなり変更されているが，本稿で用いる地名は全て所拠文献に従っている。このような対処の仕方だと同一地点が異なる地名で現れることになるが，本稿においては支障を来たすことはない。

§1「踝」の二様の例外的対応

「踝（くるぶし）」は普通話では“踝骨 huáigǔ”と言う。“踝”は中古音の帰属を見ると，仮摂合口二等上声馬韻匣母（以下慣例に従い，これを“仮合二上馬匣”のように示すことにする。他も同じ），『広韻』の反切は“胡瓦切”で，これに対応する現代音は huà とならねばならないところである。逆に huái という字音からは，中古の帰属は“蟹合二平皆匣”くらいが予想されるが，こ

れに対応する反切，直音を収める韻書，字書は管見の及ぶ限りでは見当たらない。勿論，「特字」（切韻系韻書の記載漏れ）の可能性も否定できないが，“胡瓦切”に該当する字音が何らかの要因で特殊な変化を生じてhuáiになったという可能性も検討に値すると考えられる。先ずは以下の例を参照されたい。

陝西米脂：踝腰骨 xuɑ^{33} lɑ^{0} ku^{0}　脚与胫连接处两旁突出骨 684；阳平33，去声52

山西平魯：滑腊骨 xua^{53} la^{53} ku$^{324\text{-}31}$ 踝骨　88；阳平33，去声53

陝西府谷：滑拉骨 xua^{44} la^{44} ku^{3}　怀(踝)子骨　739；阳平44，去声52

宁夏同心：滑拉骨 xua^{53} la^{0} ku^{0}　踝骨｜踝，音“华”　144

内蒙古临河：划拉骨 ˨˩˦xua la˧ kuɛ　踝子骨　普通2562

内蒙古呼和浩特：划拉骨 ˨˦xu la kuəʔ˩˧　踝子骨　普通2562；平声33

陝西神木：划拉骨儿 xua^{44} la^{42} kur^{0}　踝骨　561；阳平44，去声42

陝西子洲：踝拉疙瘩 xuɑ^{33} la^{33} kəʔ^{3} tu^{213} 脚与胫连接处两旁突出骨　459；阳平33，去声52

内蒙古临河：划拉圪嘟 ˨˩˦xua la˧ kɛʔ˩˧ ˨˦tu　踝子骨　普通2562

陝西绥德：划拉圪嘟儿 ˨˦xua la kəʔ˩˧ ˥˧tur　踝子骨　普通2562；平声33

陝西子长：滑二骨 xua^{24} ər^{42} ku^{0}　怀(踝)子骨　767；阳平24，去声42

河北安国：踝子骨 xua^{22} tsɿ^{0} ku^{213}　踝骨　929；阳平22，去声51

河北博野：滑子骨　词汇266

河北藁城：脚滑子骨　词汇266

河北束鹿：脚滑骨　词汇266

これらの例は声母，韻母に関しては内蒙古呼和浩特方言の例以外全て“胡瓦切”に合致すると考えて良い。ところが声調に着目すると，山西平魯方言だけは去声で一致するが，他は内蒙古呼和浩特方言及び綏德方言の平声（この二方言は陰平，陽平を区別しない），そしてそれ以外が陽平となっており一致しない。去声の連読変調調値が陽平の単字調値と一致しているという可能

性もあるが，所与のデータからはそれを裏付けるような記述は窺えない。固定した常用語彙の連読変調は通常の二字の連続を読むことで得られるような調値と一致しないこともあるし，ぞんざいな当て字に合わせて語源の再解釈がなされて本来の声調が当て字の声調に取り替えられてしまうといったこともある。しかし広い範囲で，調値が様々に異なるにも拘らず，声調が去声ではなく，等しく陽平となっているからには，声調のズレに関して何らかの説明が必要である。

上掲例にみられる当て字“划，滑”が旧入声字であることが気になるところである。但し前者については，“仮合二平麻匣 huá”，“梗合二入麦匣 huà”の二音があり，平声の方は「(舟を) 漕ぐ」の意で，これに対応するものなら，当然旧入声ということにはならず，除いて良い。入声の方は繁体字では“劃”と書かれ，本来は二字二音であったのだが，簡体字では前者に統一されてしまい，その結果一字二音となったのである。この全濁入声の字音は規則的変化を遂げたならば，普通話であれば huó 若しくは huái となるべきところである。入声が舒声化している北方方言の多くは全濁入声を陽平に派入させているから，もし独自に変化を遂げた字音を現在も保っているならば，“划，滑”はこのような方言においてはどちらも多く陽平となって現れていると予想される。例えば，タブー語（実際には該当するものが思いつかない）との同音衝突を避ける等の hua の去声を意図的に避けるようなことがなかったものとして，もし“踝骨”という語構成がかなり古いものなら，ɣua kuət →ɣuat kuət→xuaʔ kuʔ→xua ku のような畳韻化を経た可能性がある。この推定だと全濁入声が舒声化して陽平になるという北方方言に広く見られる音韻変化が適用されることになるから，“踝”が xua の陽平である説明はつく。連音変化の結果，“滑* ɣuɐt>ɣuat”と同音になり，その後はこの字と同様の音韻変化を蒙った訳である。“滑”は黠韻*(u)ɐt 所属であるが，恐らくは既に二等重韻の関係にある鎋韻*(u)at と合流していたはずである。“踝”に“滑”が当てられた時点で鎋韻と黠韻の区別が依然保たれていたの

であれば，近似の字音を持つ字として“滑”が当てられたということになる。慧琳音義（8世紀後半）でこの二韻は合流しているから，北方ではかなり早い時期から同音であったことが分かる。前者の解釈を取って良かろう。xua（陽平）という字音に関しては後で論ずる“胯骨：髋骨”（“胯”は仮合二去禡溪。広韻“苦化切”）との区別を際立たせるために，声調を読み替えたという可能性もないではないが，そのように仮定した場合，なぜ一律に陽平なのかということが説明できないし，同音回避ならば，声母若しくは韻母（の一部）の取り替え例があってもおかしくないのに，それが見当たらない。この可能性は検討するに及ばないだろう。

或いは後続音節声母を韻尾として取り込んで ɣuak kuət→ɣuak kuət のような連音変化を生じたとも考えられる[1]。そうであれば，“踝”が xuai（陽平）となることは，うまく説明がつく。ɣuak は中古音だと“梗合二入陌匣”に該当するが，このような連音変化が生じた時点には既に二等重韻の関係にある麦韻 *ɐk と合流していたであろう。ならばこの字は“获”と同音ということになる。もし二等重韻の関係にある陌韻と麦韻が依然区別を保っていたならば，陌韻には常用字が少ないから，近似の麦韻所属の常用字を用いたということになる。上に述べた鐺黠韻と同様，唐代の北方音資料にはこの二韻の区別は見られないから，前者の推定で話を進めて良かろう。“获”は普通話では huò（北京の旧読には hù という音もあった）と読まれるが，旧 -k 韻尾の痕跡を母音韻尾で残すかたちで入声韻を舒声化している多くの北方方言では xuai（陽平）と発音される[2]。麦韻所属字が現代北方方言において ai,uai のような韻母になるのは音韻変化の結果である。ならば，これと同音となった“踝”もまた同様の変化を遂げて xuai（陽平）となるはずである。参考までに同じ麦韻二等合口の見母字“蝈”を以下に掲げる。この“蝈”という字は普通話で guō と発音され，旁の“国”もまた guó と発音されるせいか，北方方言において kuai（陰平）で現れる場合には本字とは認識され難いようで，当て字による漢字表記をする場合が少なくない。以

下を参照されたい：

山东德州：蝈子 kuɛ$^{213\text{-}21}$ tsɿ^{0}　130

山东济南：乖子 kuɛ$^{213\text{-}21}$ tsɿ^{0}　蝈蝈　市志48 ← “蝈子”

山东齐河：乖子 kuai^{213} tsɿ^{0}　蝈蝈　715 ← “蝈子”

河北南宫：拐子 kuai^{214} tsɿ^{0}　蝈蝈　739 ← “蝈子”

河北枣强：掴子　蝈蝈　873 ← “蝈子”

山东平原：蝈蝈/guai^{21} guai/　726

山东青岛：乖乖 kuɛ^{213} kuɛ^{0}　蝈蝈儿（＝莱阳）山东95 ← “蝈蝈”

河北新河：拐拐　蝈蝈　600 ← “蝈蝈”

つまり当て字がなされることによって，普通話の字音に取り替えられることが防がれ，その方言本来の字音形式を保つことが可能となったのである。“踝”は恐らく本来“踝骨”というような語形でしか用いられることがなく，ここで現れる xuai（陽平）という字音が代表性を持つようになり，本来の字音に取って代わって字を読む場合にも用いられるようになったものであろう。特定の語形において個別的な変化の結果生じた字音が代表性を獲得して，他の語形においても適用される事例は太田（1994）で指摘した。以下の挙例中の最後の邯鄲方言の例はそのような例と思われる。

河北巨鹿：踝骨 xuai^{31} ku^{33}　外踝骨　703

河南获嘉：踝骨 xuai^{31} ku$^{\text{ʔ}33}$　研究194

山东济南：踝骨 ˨˩˦xuɛ ku　踝子骨　普通2562

内蒙古集宁：踝骨 ˨˦˨xuɛi kuəʔ˧˩˧　踝子骨　普通2562

黑龙江齐齐哈尔：踝骨 ˨˩˦xuai ˥˧ku　踝子骨（＝黑龙江哈尔滨，辽宁丹东）普通2562

黑龙江佳木斯：踝(子)骨 ˨˩˦xuai（tsə）˥˧ku　踝子骨　普通2562

湖北天门：踝骨 ˨˩˦xuai ku˧˩˧　踝子骨　普通2562

安徽合肥：踝骨 ˨˩˦xuɛ kuəʔ˧˩˧　踝子骨　普通2562

河北邯郸：踝 ˨˩˦xuai　踝子骨　普通2562

§2.1「踝［xuai］子骨」の「子」

“踝骨”から“踝子骨”，“踝拉骨”への変化についても確たることは言えないが，現時点で考え得る幾つかの成立過程を提示しておきたい。先ず指摘しておくべきは“踝子骨”という語形を採る場合の“踝”は概ね［xuai］，“踝拉骨”という語形を採る場合の“踝”は概ね［xua］となっており，逆になる例は極僅かしかないということである。それらの例外については次節で検討することとして，先ずは“踝［xuai］子骨”というタイプの語形の成立について考察する：

山东聊城：踝子骨 /huáizigū/ 指人脚两旁突起的骨，相当普通话‘脚腕子’，即‘踝’　FPJ6／38

踝子骨 xuɛ$^{42\text{-}44}$ tsɿ^{0} ku^{13}　志85

北京平谷：踝子骨 xɤ^{55}［～xuai^{55}］tsə^{0} ku^{214}　203

河南商丘地区：踝得疙瘩 xuai^{53} tei^{0} kə^{24} ta^{0}　脚踝　1749

河南洛阳：怀子骨 xuai^{31} tsə^{0} ku^{33}　研究156

踝子骨 xuai^{31} tsə^{0} ku^{33}　内踝和外踝的统称　词典119

山东菖县：怀子骨 xuai$^{53\text{-}13}$ tsɿ^{0} ku$^{55\text{-}13}$　126

山西临汾：踝子骨 ˨˩xuan tsɿ ˨˦ku　踝子骨　普通2562

“踝子骨”は“踝xuai（陽平）”が“怀：妊娠する”と同音であることから，“踝骨”→“怀骨”という当て字が為され，それが定着した後に，その意味をより明確にすべく“怀”を“怀子”とすることで“怀子骨”という語形が成立したのであろう。このタイプの語形に現れる“子”はいずれも軽声になっているが，それはその後名詞接尾辞と解釈されるようになったためと考えられる。河南商丘地区方言の当て字表記の“得”は普通話の“子”尾に相当する名詞接尾辞である。同方言で ts- が t- となっている例が他に見当たらないし，韻母もまた対応しないので，“得”の語源が“子”であるとは言い難い。“得”自体に「子供」の意味があるのか所拠文献からは確認できないのだが，用例を見る限りでは普通話の“子”と等価交換できるような用

法である。「子供を宿す」の意味で“怀得”と言えるのであれば，類例と見なすことが可能である。“得”が名詞接尾辞としてしか用いられないものであるならば，“怀子骨”の語形が成立した後に“子”が名詞接尾辞と解釈されて，等価の“得”に取り替えられて“怀得骨”になったということになるであろう。“疙瘩”は或いは“骨头”が民間語源によって変わったものかも知れない。“踝子骨头”というような語形の報告例は見ないが，“踝子骨”の“骨”から“骨头”を想起し，これが“疙瘩”に変わるといったことは十分に考えられることである。漢字表記は“怀得疙瘩”となってはいないが，この語形自体が如上の変遷過程を辿ったことを物語っている。このタイプの一異型として以下の例がある：

山东临沭：踝儿疙瘩 xuɛ^{53} ər^{0} kə^{213} te^{0}　　踝骨　　589

この場合も第一音節の漢字表記は“踝”となっているが，“子”ではなく同義語の“儿”を用いて“怀儿”としたことが明らかである。何故ならこの方言の“儿”尾は語幹音節と融合して児化音節を形成する。もしこの語形の“儿”も名詞接尾辞であるならば，先行音節と融合しているはずである。然るに軽声ではあるものの独立した音節であるところから，これが「子供」の意味の名詞であることが知れる。

“怀骨”全体からではなく，その一部の“怀”だけからこのような変化が生じるということは次の例からも首肯できる。

陕西黄龙：后儿骨 xour^{44} ku^{0}　　踝骨　628

cf. 后儿 xour^{44}　后天　627

山东济宁：踝树疙瘩 xuɛ^{42} su^{312} kə$^{213\text{-}21}$ ta^{0}　　踝子骨　　山东191

cf. 槐树 ⊆xuɛ su　　槐树　　普通3573

陕西黄龍方言の例は“踝拉骨”が恐らく，xua la ku→xua lə ku→xua ɚ ku→xuə ɚ ku のように変化した後に“后儿”との間に類音牽引を起こしてできたものだろう（これについては§3で詳述）。北方方言において「動詞＋完了を表す動詞接尾辞“了”」という組み合わせの先行動詞音節が後続の

“了”を呑み込んで一音節化し，形態的に動詞音節が「児化」と同じ形で現れる例があるのを見れば，上記の推定変化過程はさして異とするに当らない。山東済寧方言の例にしても“槐树”への連想が働くのは“踝子疙瘩”からというのではなく，“踝”のみに着目した結果であろう。周辺の方言には

山东成武：踝子疙瘩　　踝骨　680

山东曹县：踝子疙瘩 xuai^{42} tei^{0} kə^{13} ta^{0}　踝子骨　山东191

という語形は見られるが，“踝疙瘩”という語形の報告例はないから，済寧方言の元の語形は“踝子疙瘩”であったことが予想される。そうであっても“踝子”—“槐籽”の類音関係というよりは，“踝”—“槐”の類音関係を利用したものであって，“槐”の意味を明確にすべく“子”を“树”に改めて“槐树”としたと考えるべきであろう。一種の民間語源による語形変化と考えるべきである。xuai（陽平）に該当する常用字と言えば，“怀”か“槐”しかないということも，このような連想を容易にさせるものと思われる。

“踝骨”の“骨”が“孤”，“觚”などの陰平の当て字で表記されることがある。これは恐らく少なからぬ方言で清入声が規則的に陰平に派入していることと関係していると考えられる。“骨”もまた清入声字だからである。但しこの場合は以下のように異なる語形をとる（このタイプの語形については§6で改めて論ずる）。

山东文登：脚觚觚 cyo^{213} ku^{53} ku^{0}　踝子骨　911

山东长岛：脚孤根 cyo$^{214\text{-}55}$ ku^{31} kən^{0}　脚踝骨　49

山东博山：脚孤拐 tɕyo$^{214\text{-}24}$ ku$^{214\text{-}31}$ kuɛ^{0}　研究137

山东济南：脚孤拐 tɕyə^{213} ku^{21} kuɛ^{0}　脚大趾和脚掌相连向外突出的部分　市志145

河北丰宁：脚孤盖 tɕiau^{214} ku^{55} kai^{0}　脚掌两側突出的骨头　1081

河南鹤壁：脚箍拐 tɕyʌ? ku^{33} kuai^{55}　踝骨　1598

“怀孤（孤児を抱く？）”という語構成が想起されるとは些か考え難いし，“孤”が（親のない）「子供」を意味するとはいえ，これが更に“怀子孤”と

なるとは更に考え難い。“怀孤子”，“怀孤儿”といった形式が皆無であることがこのような解釈を否定する根拠となるだろう。“怀古：昔を懐かしむ”という同音語（もしくは類音語）があるが，これから“子”が出てくる余地はない。何より paradigmatic な関係で俎上に上がるのはもっと卑近な語彙であるはずで，このような語彙は詩人はいざ知らず，一般庶民の日常会話でそう出てくるものではない。“身子骨：体格”，“扇子骨：肩甲骨”，“肋子骨：肋骨”，“锁子骨：锁骨”などのように“～子骨”という語構成の身体名称には様々なものがある。こういった語形よりの類推という可能性もあろうか。

山东新泰：身子骨儿 ʃẽ$^{213\text{-}212}$ tθɿ^{0} kur^{213} 体格 80

河北河间：身子骨 ʂən^{44} tsɿ^{0} ku^{213} 身体 769

山东德州：扇子骨 ʂã$^{21\text{-}42}$ tsɿ^{0} ku^{213} 肩胛骨 83

河北清河：扇子骨 肩胛骨 707

新疆乌鲁木齐：锁子骨 suɤ^{52} tsɿ^{21} ku^{21} 116

cf. 锁子 suɤ^{52} tsɿ^{21} 102

新疆焉耆：锁子骨 suo^{51} tsɿ^{21} ku^{21} 236

cf. 锁子 suo^{51} tsɿ^{21} 216

河北定兴：锁子骨/suo$^{213\text{-}33}$ zi^{0} gu^{213}/ 锁骨 158；阴平调值33，上声调值213

山东莒县：锁子骨 suɤ^{13} tsɿ^{0} ku^{55} 锁骨 124；阴平调值13，上声调值55

河北昌黎：梭子骨 suo^{32} tsɿ^{0} ku^{213} 锁骨 230；阴平调值32，上声调值213

陕西西安：肋子骨 lei^{21} tsɿ^{0} ku^{21} 肋骨 134 ← “肋肢骨”

陕西岐山：肋子骨 ˏləi tsɿ ˏku 肋骨 700 ← “肋肢骨”

ここに挙げた語形のうち，“身子骨(儿)”は「体，体格」という意味である。この意味の同源語彙として，“身子”，“身膀(子／儿／骨)”，“身板(子／儿／骨)”，“身巴骨”という語形はあるが，“身骨”という語形の報告例は見当たらない。[3] 先ず“身子：体，体格”があって，これに“骨(儿)”が付いて出来上がったものと考えるべきであろう。“扇子骨”は恐らく“肩膀子：肩”から“肩膀子骨：肩甲骨”のような語形が生まれ，tɕian paŋ tsɿ ku→

tɕian pan tsɿ kuとなった段階で最初の三音節が“锨板子”への連想が働き，“锨板子骨”となったものと考えられる。“肩膀子骨”という語形はこれまでのところ報告例がないが，“肩膀子”については以下の例がある。

山东枣庄：肩膀子 tɕiæ̃$^{213\text{-}211}$ paŋ^{24} tsɿ^{0}　肩　93

山东平邑：肩膀子 tɕian^{213} paŋ^{34} tsɿ^{0}　肩　85

山东滕县：肩膀子 tɕiæ̃^{213} paŋ^{24} tsɿ^{0}　肩　566

河北昌黎：肩膀子 tɕian$^{32\text{-}33}$ paŋ^{213} tsɿ^{0}　230

北京平谷：肩膀子 tɕian^{35} paŋ$^{214\text{-}21}$ tsə^{0}　201

陕西富平：肩膀子 / ˏJian ˏBang ˏZi /　855

そして ɕian pan tsɿ ku→ɕian pa tsɿ ku→ɕian tsɿ kuとなり，今度は“扇子”への連想が働いたのであろう。もし“身子骨”という語形が既に存在していたならば，その存在はこのような連想が容易に働くようにする触媒作用を果たしたかも知れない。

山东阳谷：板子骨 pan$^{55\text{-}13}$ tsɿ^{0} ku^{13}　肩胛骨　山东117　←“膀子骨”

山东高密：锨板骨 ɕian$^{213\text{-}21}$ pan^{44} ku^{44}　肩胛骨　山东186

山东威海：锨板子骨 xian^{53} pan^{312} tsə^{0} ku^{312}　肩胛骨　山东186

山东牟平：锨板子骨 çian$^{51\text{-}55}$ pan^{213} tə^{0} ku^{213}　肩胛骨　264

山东烟台：锨板子骨 çian^{31} pan^{214} rə^{55} ku^{214}　肩甲骨　196

山东平度：锨板子骨 çiã^{214} pã^{0} tsɿ^{0} ku^{55}　肩胛骨　117

山东沂水：锨巴子骨 ɕiã$^{213\text{-}21}$ pɑ^{0} ðɿ^{0} ku^{44}　肩胛骨　89

山东利津：掀之骨 ɕiã$^{213\text{-}21}$ tʂɿ^{0} ku^{0}　肩胛骨　73

山东临淄：掀支骨 ɕiã$^{213\text{-}31}$ tʂɿ^{0} ku^{44}　肩胛骨　561

山东东营：掀肢骨 ɕiã$^{213\text{-}21}$ tʂɿ^{0} ku^{0}　肩胛骨　1436　＝山东广饶 869

山东青州：锨子骨 ɕian$^{214\text{-}21}$ tsɿ^{0} ku^{44}　肩胛骨　山东186

点線以下の山東利津，臨輜，東営方言の語形は“锨子骨”と“肋支骨：肋骨”の混交によって成立したものと思われる。身体名称同士の混交が様々なかた

ちで起こることを示していると言えよう。“锁子骨”は“锁”の意味を明確にすべく名詞接尾辞の付いた“锁子”に変えたものと思われるが，“锁”は名詞として用いられる場合，全ての方言が名詞接尾辞を“子”とする訳ではない。方言によっては“头”が選ばれる場合もあれば，接尾辞を付けないで用いる場合もある。このような“锁子”を持たない方言においては“锁骨”→“锁子骨”という変化は考え難い。恐らくそのような方言にあっては方言間借用により取り入れられた“锁子骨”が定着することなく，“锁子”を類音関係にある，既存の“～子”という語構成の“梭子”に取り替えた。河北昌黎方言の例は正にこれに該当する。山東莒県方言の例も実のところ漢字表記こそ“锁子骨”であるが，ここに現れる“锁”は陰平調値をとっており，“锁”が本来とるべき上声調値とは異なる。“梭子骨”となる一歩手前の段階と言えようか。河北定興方言の場合，軽声が後続する場合の陰平（33）の調値は33（不変），35，21，35～21の4種あり，同じく軽声が後続する上声（213）は35，21，35～21，33の4種ある。所拠文献の挙例（pp.43-44）を見る限りでは，分岐条件は不明である。上記の“锁”変調調値（213→）33は文字を“梭”と改めて33（不変）と処理することも可能である。定興方言においてもやはり昌黎方言同様の取り替えが起こっていると考えてよい。陝西西安，岐山方言の“肋子骨”は“肋支”若しくは“肋肢”に“骨”が付いた語形を語源とするもので，第二音節が名詞接尾辞と解釈されてできたものである。“肋子骨”もまた“肋肢”若しくは“肋支”の第二音節が名詞接尾辞“子”と解釈されて“肋子”となっている語形があるから，これもまた既に存在する“肋子”に“骨”が付いたと考えて良いだろう。“肋肢骨”若しくは“肋支骨”が“肋子”とぶつかって“肋子骨”ができたとしても良い。

山西文水：肋肢 lə$ʔ^{2\text{-}1}$ tsɿ^{20}　肋骨　78

山西天镇：肋肢 lua$ʔ^{32}$ tsɿ^{31}　肋骨　42

山西万荣：肋肢 lʌŋ^{51} tsɿ^{20}　肋骨　词典331

河南武涉：肋子 lɒ$ʔ^{3}$ tsɿ^{2}　515

陝西甘泉：肋子 lei$^{41\text{-}312}$ tsɿ^{41}　730

河南获嘉：肋支 lɐʔ^{33} tseʔ^{0}　肋巴骨　课本494

山西平遥：肋子儿 lʌʔ^{53} tsɿ$^{13\text{-}31}$ ʐʌʔ^{23}　肋间　116

山东淄川：肋肢骨 luei$^{31\text{-}55}$ tʂu^{0} ku^{0}　肋骨　81

山东博山：肋之骨 luei$^{31\text{-}55}$ tʂɿ^{0} ku^{214}　肋骨　136

山东临淄：肋支骨 luei$^{31\text{-}44}$ tʂɿ^{0} ku^{44}　肋骨　561

山西陵川：肋肢骨 liʌʔ^{34} tʂɿ^{33} kuɤʔ^{32}　肋骨　43

山西沁县：肋支骨 luʌʔ^{4} tsɿ$^{213\text{-}22}$ kuəʔ^{4}　肋骨　31

山西清徐：肋支骨 l(i)əʔ^{4} tsɿ$^{213\text{-}22}$ kuəʔ^{4}　肋骨　40

山西平遥：肋支骨 lʌʔ^{53} tsɿ$^{13\text{-}31}$ kuʌʔ$^{23\text{-}45}$　肋骨　116

このように考えると，上掲例はいずれも“～骨”の前にある要素を“～子”という語構成の既存の名詞に取り替えたものと解釈できる。これらの例からすると，“踝子”という語がない状況において自律的変化によって“踝骨”から“踝”＋接尾辞＋“骨”という語構成に転ずるとは考え難いと言えるのではなかろうか。

上掲の“～子骨”という語形が一方言に全て現れるものかどうか，資料の制約があって確認できない。しかし以下のような例を見ると同じ語構成に揃えるといった意図が働くことについては十分理解できる：

山东新泰：颧巴骨 ⸦tɕʰyæ̃^{55} pa^{3} ⸧ku^{214}　**颧骨**　研究169

牙巴骨 ⸦ia^{55} pa^{3} ⸧ku^{214}　**牙骨**　研究169

嘴巴骨 ˂tθuei^{51} pa^{3} ⸧ku^{214}　**嘴巴**　研究169

山东新泰：颧巴骨 tɕʰyã$^{42\text{-}55}$ pa^{0} ku^{0}　**颧骨**　志81

牙巴骨 ia$^{42\text{-}55}$ pa^{0} ku^{0}　**牙骨**　志81

肩巴骨 tɕiã$^{213\text{-}212}$ pa^{0} ku^{213}　**肩胛骨**　志82

腚巴骨 tiŋ$^{31\text{-}54}$ pa^{0} ku^{213}　**臀部骨骼的统称**　志82

この二つの所拠文献の著者は同一人物で，後者の方は山東省方言志叢書の体例に併せて語彙の取捨選択，補遺が行なわれた結果，収録語彙にズレが生じ

ており，また声調調値にも微細な違いが見られるが，上掲例は全て同一方言の語彙であり，内部差異を考慮する必要はない。

§2.2「踝[xua]子骨」の「子」

今筆者の集めたデータの中から該当例を網羅すれば以下の通りである。本節に現れる“踝”は特に断らない限り，[xua]という音声形式である：

河北安国：踝子骨 xua^{22} tsɿ^{0} ku^{213}　　踝骨　929；阳平22，去声51

河北定州：踝子骨 xua$^{24\text{-}42}$ tsɿ^{0} ku^{24}　　1129；阳平24(＝上声)，去声51

脚踝子 tɕiau$^{33\text{-}35}$ xua$^{24\text{-}42}$ tsɿ^{0}　　1129

cf.叫花子 tɕiau$^{51\text{-}53}$ xua^{33} tsɿ^{0}　　①沿街乞讨的乞丐②乞丐　1128

河北高邑：踝子骨　　“踝”音转如滑　　654

河北博野：滑子骨　　词汇266

河北藁城：脚滑子骨　　词汇266

河北束鹿：脚滑骨　　词汇266

上掲例には漢字表記で表せば“踝子骨”，“脚踝骨”，“脚踝子骨”，“脚踝子”という四つの語形がある。これらが“踝骨”を元にしてできたものであったとしても，全てをただ一つの変化過程で説明することは不可能である。統一的に解釈しようとすれば，以下のような変遷過程が複数存在したことを想定することになるだろう：

A1.“踝骨”→“脚踝骨”→“脚踝子”

A2.“踝骨”→“脚踝骨”→“脚踝子骨”→“脚踝子”

B1.“踝骨”→“踝子骨”→“脚踝子骨”→“脚踝子”

B2.“踝骨”→“踝子骨”→“脚踝子骨”→“脚踝骨”

“踝骨”が“胯骨”との音声的類似を回避すべく，A1.若しくはA.2に見られるような“脚踝骨”となった段階で“骨”を名詞接尾辞“子”に取り替えた，それには“叫花子”との類音牽引があったであろう。この推定の場合，“踝子骨”，“脚滑子骨”の成立を説明できない。河北定州方言の“脚踝子”[(4)]

はA1.もしくはA2.の“脚踝骨”の段階で，“脚踝”と“叫花(子)”の音声的類似が想起されて“脚踝子骨”→“脚踝子”となったか，或いはA2.もしくはB1.の“脚踝子骨”となった段階で“叫花子”との音声的類似が意識されて“脚踝子”となったものだろう。先に“脚踝子”ができたと考えると，それから“踝子骨”への変化が説明できない。当て字がなされる場合などには声調が合わない字が用いられることもあるが，そのような場合には各方言間で様々な声調の字が用いられるであろうと思われる。しかるに上掲例の“踝”はいずれも［xua］(陽平）である。先に去声であったものが何らかの語彙との間に類推が働いて陽平になったとも考え難い。それゆえ陽平の“踝”から“花籽”，“花子”への連想は想定し難い。“花(籽)”もしくは“花(子)”の“花”［xua］(陰平）とは声調が異なるからである。“踝骨”より“花籽骨”，“花子骨”といった語彙が生じる余地もない。[(5)] 或いは“踝骨”から“滑骨头：ずるい奴”への連想が働き，そこから更に“花子”が連想されて“踝子骨”という語形が成立したものであろうか。現時点では単なる思い付きの域を出ない上，この場合もやはり“花子骨”という語形の報告例がないので，説得力に乏しい。

北方方言には例えば，太田（1999）で指摘したように“雁”と“燕”が同音となるところから，混同を避けるべく“雁”を“大雁”“老雁”などと言うのに対し，“燕”を“(小)燕儿”“(小)燕子”などのように表現して両者を区別している例がある。“踝”と“胯”を大小の対比で捉えたとして果たして“踝骨儿”，“踝骨子”ではなく“踝子骨”が生まれるものであろうか。もしそれが可能ならば“踝儿骨”もあっておかしくない。以下は名詞接尾辞を有する語形及び名詞接尾辞由来の可能性のある要素を含む語形である。

山东淄川：脚怪骨子 tɕyə^{214} kuɛ$^{31\text{-}55}$ ku^{0} ə^{0}　　**踝骨**　84

山东博山：脚拐骨ə tɕyə^{214} kuɛ^{55} ku$^{214\text{-}31}$ ə^{0}　　**踝子骨**　136

河北定州：脚踝子 tɕiau$^{33\text{-}35}$ xua$^{24\text{-}42}$ tsɿ^{0}　　**1129**

河北万全：脚拐子　　踝骨部分　　**955**　(＝怀安 638)

天津静海：脚脖子 tɕiɑu^{43} po$^{55-35}$ tsə^{20}　　**脚踝**　743

山东平度：脚骨拐儿 cyə^{55} ku$^{55-45}$ kuɛr^{0}　**踝骨**　118

山东牟平：脚固跟儿 cyuo$^{213-35}$ ku^{51} kər^{0}　　脚踝骨内外两侧的突起部分　146

河南济源：脚骨爪儿 tɕiɐʔ kuə tʂuæ　　踝子骨　521

陕西神木：划拉骨儿 xua^{44} la^{42} kur^{0}　　踝骨　561＝陕西南郑 561

山西娄烦：拐箍儿 kuɛi^{312} kur^{33}　　脚踝　671

甘肃张家川：拐踝儿 kuei^{42} kuər^{24}　　踝骨　1408

陕西黄龙：后儿骨 xour^{44} ku^{0}　　踝骨　628

陕西绥德：踝二骨 xua^{33} er^{51} ku^{0}　　脚与胫连接处两旁的突出骨　陕北 77-78；阳平33

陕西子长：滑二骨 xua^{24} ər^{42} ku^{0}　　怀(踝)子骨　767；阳平24，去声42

上掲例は該当するものを網羅した訳ではないが，名詞接尾辞の位置のパターンは“踝子骨”をさて措けばこれ以外はない。“～子”，“～儿”以外のタイプと思しき例は管見の及ぶ限りでは末尾の三例である。綏徳，子長方言の例は所拠文献に「脛」の記載がないので断定はできないが，周辺に以下の身体名称が存在するところから，やはり類推により“踝拉骨”が変化してできたものと見なした方が良い。

「脛」

陕西岚皋：连二杆 lian^{31} ər^{31} kan^{53}　　胫骨　530

陕西宁陕：连二杆 lian^{21} ər^{21} kan^{53}　　小腿前面，即胫骨部　717

山西忻县：连二杆 liẽ^{313} ər^{53} kã^{313}　　小腿骨　589

山西平遥：连二杆 liɛ$^{13-31}$ ər^{35} kɑŋ^{53}　　小腿前面的胫骨部分　119

山西娄烦：连韧杆 liɛ^{33} zəŋ^{54} kæ^{312}　　胫骨　671

山西沁县：连纫骨 lɪ^{33} zəŋ^{54} kuəʔ^{4}　　小腿骨　31

山西榆次：镰刃杆 lie^{11} zəŋ^{35} kie^{53}　　小腿骨　1012

山西太原：臁刃杆 lie^{11} zəŋ^{45} kæ̃^{53}　　胫骨　词典81

山西忻州：臁认杆 liẽ^{31} ʐəŋ^{53} kã^{313}　　臁骨　222

山西万荣：臁杆 liæ̃^{24} kæ̃$^{55\text{-}33}$　小腿上靠内侧的那根骨头连通它上面的肌肉

词典295

山西山阴：连肉杆子 liɛ$^{313\text{-}31}$ ʐəu$^{335\text{-}35}$ kæ$^{313\text{-}31}$ zəʔ^{0}　　笔骨　37

江苏南京：连肉杆子 lien^{24} ʐəɯ^{44} kɑŋ^{11} tsɿ^{0}　　胫骨　　277

所与のデータから想定される上掲「脛」諸語形の変化過程は以下の通り：

(臁骨→)臁杆 lian kan→臁肉杆 lian ʐəu kan→镰肉杆 lian ʐəu kan→镰刃杆 lian ʐən kan→镰刃杆 lian ʐə kan→镰二杆 lian ɵ kan→连二杆 lian ɵ kan

先ず“臁骨”の“骨”が民間語源で“杆”となったと考えられる。上掲例は南京方言以外は全て陝西か山西の方言である。この地域の方言には鼻音韻尾が弱くなっていたり，失っていたりするものが多い。上掲例の中では山西娄煩，榆次方言しか該当しないが，このような地域特徴は恐らく“骨”と“杆”の音声的差異を縮めて，一方からもう一方への連想がより容易に働く素地となっている。“骨”を“杆”に取り替えた後，“杆”の意味を明確にすべく“肉杆：肉の棒”としたのであろう。“臁肉杆”が畳韻化して［lian ʐən kan］となった後，“臁”と“镰”が同音であるところから，“镰刃杆”という当て字がなされたか，若しくは“臁肉”の部分が類音牽引で“镰刃”となった後に第二音節が弱化して“镰二杆”→“连二杆”となったものだろう。最後の当て字の変化は［lian ɵ］を「次に続く」というような語源解釈を行なった結果だと考えられる。山東方言に以下の例がある：

山东微山：二腿 l̩ə^{31} t^{h}uei^{0}　　小腿　1134

山东枣庄：二腿 l̩ɨ^{42} t^{h}ue^{24}　　小腿　94

cf. 大腿 ta^{42} t^{h}ue^{24}　　腿　94

管見の及ぶ限りで，今のところ山西，陝西方言には“小腿”を“二腿”と言う方言の報告例は無いが，この地域においても排行よりの類推で，“小腿”

を“大腿”に対比して，“二腿”とするようなことは十分にあり得る。“胫骨”を“镰二杆”，“连二杆”とするにはこのような対比の発想も関わっていると推定してよかろう。

つまり如上の変化を遂げて“镰二杆”，“连二杆”となった「脛」よりの類推で，“踝拉骨”が“踝二骨”となったと考えるのである。山西方言ではないが，山東方言には以下の例がある：

山东桓台：连骨拐 lian$^{55\text{-}24}$ ku^{0} kuɛ^{0}　　踝子骨　山东191 ← “臁骨踝”？

山西沁県方言の例はこの推定変化過程から漏れるが，これは“镰刃杆”が“～骨”という語構成に改められたものと考えておきたい。陝西黄龍方言の例も前節で述べたように“踝拉骨”が“后儿 xour^{44}”との間に類音牽引を起こしてできたものである。綏德，子長方言と同じような経過を辿ったものであれば，“踝二骨”もしくは“后二骨”とでも漢字表記されるような段階を経た後に第二音節［ə］が先行音節に飲み込まれて成立したものであろう。このように考えると，“踝儿骨”に該当する例はないということになる。(6)

現時点ではとりあえずの推測として，“踝[xua]拉骨”と周辺の方言の“踝[xuai]子骨”がぶつかったことによって，その中間形態“踝[xua]子骨”が成立したものという考えを提示しておきたい。この語形は河北省の保定－石家荘一帯に集中して存在している。手元のデータによれば，陝西省，晋語圏，河北省いずれの地域においても“孤拐”という語形が優勢だが，“踝[xua]拉骨”か“踝[xuai]子骨”かという点においては，陝西省，晋語圏では前者，河北省では後者が優勢と言える。この分布地域は晋語圏に隣接しており，如上の推定には十分な蓋然性がある。但し説得ある説明をするには方言地図の作成が必要であろう。なおこの語形の成立に当っては前節で述べたような“～子骨”が先に成立していたならば，これらの構成に合わせるという配慮も働いたことであろう。(7)

注

(1) 舒声韻が入声韻尾を有するようになる変化「舒声促変」は晋方言に顕著に見られるが，他方言にも例えば次のような例がある：

江西南昌：八哥子 pat^{55}kot$^{55\text{-}0}$ tsɿ^{0} 242

但し所拠文献では後続音節声母に同化して入声韻尾を持つようになった可能性を指摘している。また「鴿子kot^{55} tsɿ^{0} 250」との混交による可能性も考慮せねばなるまい。となると類例は見当たらないことになり，些か説得力に乏しい説明となる。同源語彙が近隣の方言間で隣接同化を起こしたり，離隔同化（畳韻化）を起こしたりする例としては次のようなものがある：

'屎壳郎：フンコロガシ'

山西平遥：屎爬牛 sɿ^{53} pɑ$^{13\text{-}31}$ ȵiou$^{13\text{-}35}$ 屎壳郎 民俗72

山西大宁：粪爬牛 fəŋ^{55} p^{h}A^{13}niəu^{13} 屎壳郎 486

河北宣化：屎邦牛 sɿ^{55} pɑ̃^{42}niəu^{42} 屎壳郎 880

河南洛宁：屎旁牛 sɿ^{21} p^{h}ɑŋ^{53} ou^{53} 屎壳郎 601

山西运城：屎胖牛 sɿ^{53} p^{h}ɑŋ^{0} ŋou^{13} 蜣螂 志39

山西临猗：屎盘牛 sɿ^{53} p^{h}æ̃^{20} ŋəu^{20} 屎壳螂 638

陕西城固：屎盘牛 /sɪpan[ȵ]iu/ 屎壳螂 638

甘肃敦煌：屎盘牛 sɿ^{42} pæ̃^{21} ȵiou^{24} 屎壳螂 88

（pæ̃^{21} 许是 p^{h}æ̃^{21} 之误 cf.“盘” p^{h}æ̃（平声）31）

cf. 屎耙牛 ˂sɿ ˂p^{h}a niou 屎壳螂 普通3732

甘肃通渭：屎螃牛 sɿ^{53} p^{h}aŋ^{324} niou^{324}(tɕiou) 屎壳郎 665

山西吉县：粪传牛 fei^{33} pf^{h}æ̃^{13}ŋou^{13} 屎壳郎 志37

陕西商县：屎抛牛儿 sɿ^{53} p^{h}ao^{11} ȵiour^{353} 蜣螂 64

甘肃临夏：屎刨牛 ʂɿ^{21} p^{h}ɔ^{13} niou^{53} 屎壳郎 1338

今音韻論的処理を施した表記で変化の推移を示せば，以下のようになろう：

sɿ pa ŋəu → sɿ p^{h}a ŋəu → sɿ p^{h}ã ŋəu → sɿ p^{h}aŋ ŋəu → sɿ p^{h}aŋ niəu

左权，榆次　陇县　临猗　运城　通渭

sɿ(ʂɿ)pa niəu → sɿ(ʂɿ)p^{h}a niəu → sɿ(ʂɿ)p^{h}au niəu

左权，榆次　陇县　商县，临夏

(2) 中古音では“划”（繁体字“劃”）は“获”と同音で，多くの北方方言で huái となることが期待されるが，この字に関しては十分なデータが集まらない。陌韻の二等牙喉音声母合口には常用字がなく，該当字は普通話の文語層の字音に一致する傾向があるようである。日常会話における使用頻度が低ければ，普通話より借用されることになるであろうから，読字調査によって得られる字音はいくら大量に集めても普通話と同じ形式のものばかりということになるだろう。刘(2000)参照。

(3) “身巴骨”は恐らく“身膀”または“身板”に“骨”の付いた語形を語源として，二音節目が弱化してできたものと思われるが，このような変化には以下のような“～巴骨”といった身体名称よりの類推が関与している可能性もある。

山东博山：下巴骨 ɕia$^{31\text{-}55}$ pa^{0} ku^{214}　下巴　135　← “下巴颏”
山东即墨：牙巴骨儿 iɑ^{42} pɑ^{0} kur^{55}　下巴　75　← “下巴颏儿”
山西洪洞：下巴骨 xɑ$^{53\text{-}44}$ pɑ^{20} ku^{20}　嘴巴　226　← “下巴颏”
河南濮阳：嘴把骨儿 tsuei^{55} pa$^{412\text{-}42}$ kur^{0}　下巴颏儿　94

山东平度：腚巴骨 tiŋ$^{31\text{-}55}$ pa^{0} ku^{55}　尾骨　136
河北南宫：尾巴骨 i^{214} pA^{0} ku^{214}　尾骨　741
山西忻州：屁巴骨子 pʰi^{53} pɑ$^{313\text{-}31}$ kuəʔ^{2} tə^{0}　尾骨　14

河南濮陽方言の“嘴把骨儿”は“嘴巴”と“下巴骨儿”（←“下巴颏儿”）より成る合成語形であり，山東平度方言及び山西忻州方言の「尾骶骨」はそれぞれ“腚”と“尾巴骨”，“屁股”と“尾巴骨”よりなる合成語形である。

(4) 定州方言の「踝」を表す二つの語形に現れる“踝”は変調調値が42で，去声の単字調値51と似ている。去声を陽平に誤認したのではないかという疑いが生じるが，去声は軽声音節が後続する場合，35または53（少数）という調値をとり，後者は書面語及び普通話より取り入れられた語彙にしか見られないという（p.1118）。陽平とすることに問題はなさそうである。

(5) 音声的類似を持つ語ということでは“花骨朵”及び民間芸能の“花鼓”，“花儿”などがあるが，これらから“花子骨”というような語構成が生じるとは考えられない。実際に“踝子骨”の“踝”が陰平で現れる例は皆無である。

(6) 国際中国語言学学会（International Association of Chinese Linguistics）第11届年会（2002.8.20-22 於：愛知県立大学）の口頭発表ではうまい解釈が見つからず，とりあえず次のような連音変化で xuai という字音が成立した可能性を提示しておいた：“踝子骨 xua tsi ku→xuai tsi ku→xuai tsɿ ku→xuai ku。先ず同化により“踝”に韻尾が生じ，その後第二音節が脱落したとするものである。途中段階が無ければ第一，二音節が合併したということになる。このような解釈だと声調が去声でなく陽平なのは，去声だと“坏”と同音になるから，それを避けたというような説明をつけることができるが，最大の欠陥は“踝骨 xua ku”に何故“子”が加わるのか説明できないことである。更に“踝[xua]子骨”という河北省の保定－石家荘一帯にしか存在しない希少語形を基に“踝[xuai]子骨”という広域的分布を示す語形が生じたとするのは無理がある。今この解釈は破棄する。

(7) 語末に接尾辞の“儿”，“子”をとる語形にしても語幹部分が異なるものが多く，“(脚)踝[xua]骨儿”，“(脚)踝[xua]骨子”と認めてよいものは皆無である。“(脚)踝[xuai]骨儿”，“(脚)踝[xuai]骨子”の方もこのままの語形ではないが，“踝”が[kuai]のようになっている語形の中には“～子”，“～儿”となっているものがある。前者は恐らく“踝[xuai]子骨”と“拐子：びっこ”との混交によるものだろう。後者はこの“子”を同義の接尾辞“儿”に変えたものと解釈できる。

〔待続〕

* 参考文献及び方言資料については完結篇の末尾に掲載する。

**本論文は平成14年度科学研究費 基盤研究（B）（課題番号 13410130）「歴史文献データと野外データの綜合を目指した漢語方言史研究」の研究成果の一部である。